



## 👁️👁️ みどころ

70歳になれば姥捨山に！平安～鎌倉時代の日本ならそれが常識だったが、韓国では？また、高麗葬とは？

キム・ギヨン監督が描き出す、巫女が支配する寒村の食料難はすごい。また、「びっこ男」「おし女」への差別と格差もすごい。そんな中、これぞ韓国流ドロドロ劇が、“姥捨て”という重いテーマを巡って大展開！

本作を観て、戦後の昭和に生まれ、新型コロナウイルス騒動の中でも71歳でなお生きていられる幸せに感謝！

### ■□■ 『高麗葬』のストーリーは？ ■□■

本作には、母親の再婚で山間の寒村にやって来た男グリョンと、その10人の義理の兄弟が登場する。そして、本作は彼らの確執を軸に、その基礎にある貧困と飢餓、そして目をそむけたくくなるような人間の本性を直視し、それを描き出している。

①障がい者になり、差別されるグリョン、②水場を独占する悪党兄弟、③姥捨て山に向かうグリョンの母、そして、④村を支配する邪悪なムーダン、等々それぞれにキャラの立った登場人物に注目！舞台のような素晴らしいセットも見ものだ。

### ■□■ フィルムの欠損部分あり！しかし、それでも・・・ ■□■

なお、本作は欠落していたラスト部分が近年復元され、日本では2007年の第20回東京国際映画祭で初上映されて観る者の度肝を抜いたらしい。しかし、物語前半で約12分、中盤で約6分は今でも欠落しているため、音声と字幕で補われている。そんな映画を観るのは久しぶりだが、冒頭に登場する巫女の踊りと韓国特有の激しい音楽のリズムを聞いていると、迫力満点で、期待が高まっていくことに。

## ■□■高麗葬とは？それは姥捨！すると本作は『楡山節考』？■□■

「生誕100年記念 異端の天才 金綺泳」のパンフレットにおける『高麗葬』の解説によると、「高麗葬（コリョジャン）とは、日本でいうところの姥捨である。全商國（チョン・サンクック）の短編小説「高麗葬」（新潮社「韓国現代短編小説」所収）の脚注によれば、『高句麗時代に老衰者を生きながらにして墓室へ移し、その死を待って葬ったならわしに由来する』という。」と書かれている。また、「老人を山に置き去りにしたり、生きたまま墓に閉じ込めたりする棄老伝説は中国やインドなどにもあるらしく、実際に行われていたのかといった民俗学的な考証はさておき、アジアではおおむね親孝行の大切さを説く教訓物語として定着」していたらしい。

そう聞けば、誰でも木下恵介監督の『楡山節考』（58年）と、今村昌平監督の『楡山節考』（83年）を思い出す。とりわけ、後者は1983年のカンヌ国際映画祭でパルムドール賞を受賞した名作だ。私は2019年1月に70歳を迎えたが、もし平安～鎌倉時代に生まれていれば、本作の母親と同じように息子に背負われて姥捨山に・・・？

## ■□■韓国の食料難に啞然！格差の大きさに啞然！■□■

日本の平安～鎌倉時代でも、平時はともかく飢饉等の天災が起きれば、食料危機を中心とする人間が生きていくための前提が脅かされることになる。しかし、本作を観ていると、朝鮮半島における高句麗時代の食料難がいかにもひどかったかがよくわかる。もっとも、「貧乏人の子だくさん」とはよく言ったもので、前妻たちに10人もの子供を産ませている男にもビックリ！さらに、「びっこの男」や「おしの女」に対する露骨な差別や、食うためなら何でもありの子供（餓鬼）たちの実態にもビックリだ。

また、本作全編を通じて驚かされるのは、巫女の権力の大きさ。日本では、卑弥呼が国王（女王）の時代があったが、本作ラストに見るグリョンの「決断」がなければ、この巫女が永遠にこの村を支配することに・・・？

私は、中国は何でも日本に10倍の規模だと考えればよいと思っているが、本作を観ていると、韓国の格差も日本の10倍の規模で考えなければならぬと痛感！

2020（令和2）年3月30日記